

パルシステム生産者・消費者協議会

第5回 青果フォーラム 報告

パルシステム生産者・消費者協議会
事務局

- ・2016年10月13日にお茶の水ホテルジュラク（東京都千代田区）にて第5回青果フォーラムを開催しました。本フォーラムは、生消協の生産者幹事・部会長を執行委員として準備を進め、消費者幹事（消費者運営委員会）とも連携したテーマ設定・報告を行っています。
- ・当日は32産地51名の生産者と株式会社ジーピーエス職員4名、パルシステム連合会職員2名、消費者幹事9名、生消協事務局2名の合計68名が参加しました。
- ・大津代表幹事の開会挨拶、鳥居果樹部会長の趣旨説明の後に、小川幹事による熊本震災報告（生消協カンパ）、大牧農場宮田社長による台風被害報告を行い、その後、2部構成で品質向上の取組とエコ・チャレンジ基準について議論を深めました。
- ・第1部は消費者幹事による品質向上の取組についての報告を行いました。消費者運営委員会では御坂くだもの倶楽部（山梨県笛吹市）を対象にフィールドワークを実施し、桃とぶどうの圃場・選果場・倉庫視察、クレームについて確認、出荷基準確認、生産者との意見交換等を行いました。その結果を消費者（組合員）の視点からとりまとめ、桃について吉田幹事が、ぶどうについて中山幹事がそれぞれ報告を行いました。
- ・第2部はエコ・チャレンジについて考える場とし、株式会社ジーピーエスの武藤部長が新エコ・チャレンジ基準についての報告を行った後に、生産者への事前アンケートをもとにパルシステムのエコ・チャレンジ基準について、導入後の課題や産地の思いを語っていただき、会場の参加者で総合討論を行いました。
- ・最後のまとめを堀口幹事より行い、参加者にて懇親会を行いました。

質疑の内容と意見・要望等

【質疑】

- ・エコ・チャレンジが理解されないのは、組合員が欲していないからではないか？誰のためのエコか考えてしまう。生産者の苦労は大きいのだが。
- エコ・チャレンジを理解されていない方もいると思うが、必要な方もいる。生産者にとって環境保全的な側面もあるのではないかと。誰のためのエコかというのは、みんなのためのエコと考える。
- 生産者は取り組みを伝えるのが下手なところがある。消費者の視点からのアドバイスをいただくと助かる。

【意見・要望等】

- ・エコ・チャレンジの取組（努力）が価格に反映されないことは悲しい。
- ・米については今回の改訂を踏まえ、生産者の意見を整理し、次回の改定に備えたい。商品として、高いものにも訳があるが安いものにも訳がある。組合員に「高い」と思わせない理解促進が課題。
- ・後継者不足・物流価格高騰など通常の野菜（慣行）でさえ、値上げしなければ産地での再生産が厳しくなっている。それを考えると、エコ・チャレンジは苦労が伴う分、もっと生産者への還元が必要。
- ・エコ・チャレンジではなくパルシステムの『産直品』すべてに価値があるのではないかと。
- ・産直の価値を高め、それを理解していただく対策が急務。
- ・パルシステムは産地と問題を共有し対話できる関係を構築している。今後もこの関係を継続し、産直の価値を

高めていきたい。

- ・消費者の属性として、有機やハイレベルの商品を求める方と、そうでない方に二極化している。生協でみた場合、パルは中間に位置する。立場的に難しいが、伸び代は大きい。
- ・エコ・チャレンジを広め、利用が普及するための手法はさまざま。紙面の打ち出し方などは職員との連携も必要。
- ・ランク付けされた農産物で評価されたいなら、県の特別栽培基準に準ずることが楽。ただし、これまでパルシステムと関係を構築してきて、今後もエコ・チャレンジを超えた環境保全型農業を継続するのであれば、エコ・チャレンジの取組とこの議論は価値あることと考える。



・会場の様子



・消費者幹事によるフィールドワーク報告



・質疑について回答する雨宮幹事



・エコ・チャレンジ基準についての議論の様子

以上